Ⅲ　パブリックスペース・デザインガイドライン

Ⅲ－１　ランドスケープ
Ⅲ－２　植栽
Ⅲ－３　サイン
Ⅲ－４　光環境
Ⅲ－５　アート
Ⅲ－６　ファニチャー
Ⅲ－７　色彩
Ⅲ－８　素材

LANDSCAPE
GREEN
SIGN
LIGHTING
ART
FURNITURE
COLORING
MATERIAL

Ⅲ－５　アート

１）コンセプト

『アート』は、新キャンパスの空間に「美しさ」や「うるおい」そして「象徴性」をもたらすとともに、生活者の“感性”を刺激し、創造的な活動を支援する。また、本学のアイデンティティを高める上でも重要な要素となる。
デザイン・マニュアルにおいては、以下のコンセプトに基き、新キャンパス全体をアート性の高い（感性豊かな）、こだわり（職人的）のある空間とすることを目指す。

①アート“環境”の創出

- 彫刻、絵画等のファインアートに限らず、キャンパス全体がアート性の高い感性豊かな環境となることを目指す。
- アートを身近な存在として「学」「悠」「住」の日常生活に織り込むことにより、アート“環境”の創出を図る。

②開かれた大学に相応しいアートワークの発揚

- 近隣コミュニティに対し豊かなアート環境を提供することで、開かれた大学としての空間づくりを行う。
- アートの導入に当たっては、本学に関わる各界各層の人々とのパートナーシップによるアート“環境”の形成を目指す。

③本学及び本キャンパスの理念の表象

- 「アジア・世界との交流」「地域に開かれた大学」「学、悠、住の充実」「地域の自然、歴史、文化の継承」といったコンセプトを表現し、普及を図る。
- 芸術工学研究院を有する本学の独自性をキャンパス空間に具現化する。

２）アートの分類とアートワークの属性

①アートワークの種別と構成

- アートワークは、一般には下図のように分類されるが、本デザインマニュアルでは、「恒久的アート」を“ファイン系アート”から“環境デザイン”までのレンジの中で捉えることとする。

- この中で、“象徴的アート”は、「大学の顔」や「アライバルポイント」等、人の集散拠点空間の「シンボル」となるアートとして位置づけられる。また、“空間を特色づけるアート”は、アイストップなど、場の「アクセント」となるアートであり、これらは目的の明確なアートと言い換えることができる。

- 一方、“環境的アート”とは、アート環境を具現化するためにキャンパス内において広域的にかぶせた『アートのメッシュ』をイメージするものである。これは、建築、広場、道路、緑地等、空間の属性に関係なく、キャンパスのエントランスのある一点を原点とするメッシュの交点付近にアートを刻印することを原則とするものであり、その意味で“ベーシック”で網羅的なアート（ネットワークアート）とも言える。

- “1㎡アート”とは、壁面や舗装面等を利用し、場所の特性に配慮しつつ知的刺激を与えるアートとして位置づけられる。

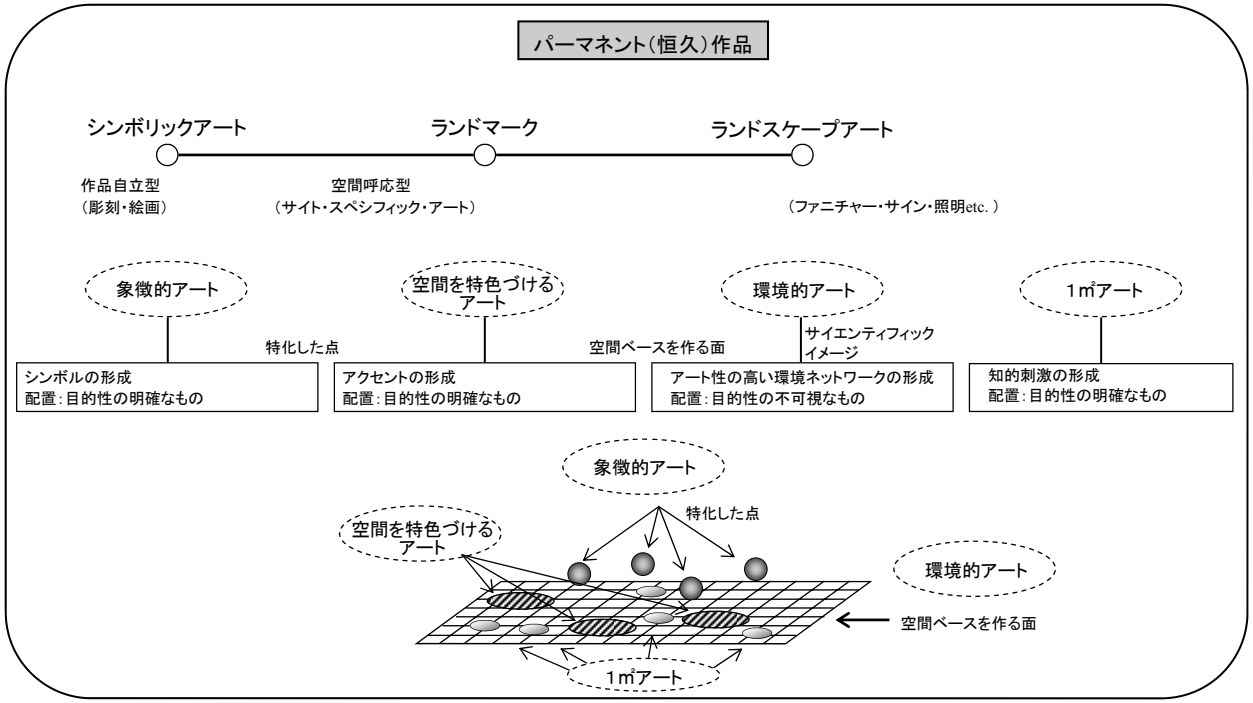
- 移転元の箱崎地区、六本松地区等からの記念碑・銅像等もアートワークの対象とする。

②アートワークの目的

- 本デザインマニュアルにおけるアートワークの目的の一つは、前述の“本学・キャンパスの理念を表象する”ことであるが、これに加えてアートの属性面より、次の3点が目的として挙げられる。

1. 知的活動を触発することや感性の刺激等、人に能動的な心理作用をもたらす側面
2. やすらぎ、潤いを与えること等、どちらかと言えば受動的な心理作用をもたらす側面
3. 以上と重複して、場の特定やランドマークとしての機能

- 以上から、アート環境の創出を図るためには、前述の構成をベースに、それぞれの空間の特性に即してアートワークの属性を付加することにより、アート環境の形成を図ることとする。



◆アートワークの種別と構成

３）全体配置イメージ

①目的の明確なアートの配置イメージ

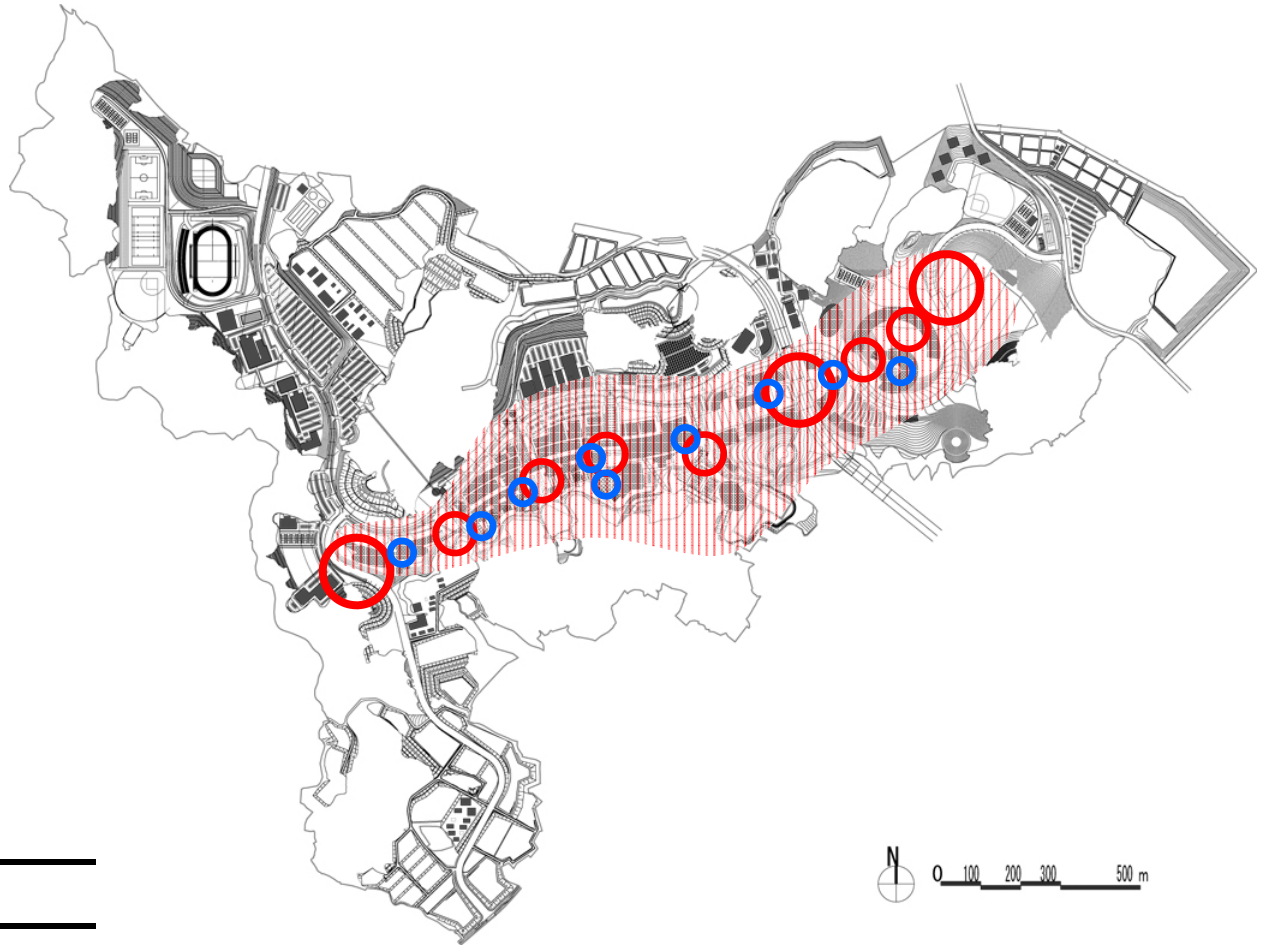
「目的の明確なアート」は、前述の全学を表象するような象徴的なアートの他、たまり空間や広場空間を特色づけるものも考えられる。また、複合系アートも多くがこの類に属するが、それぞれ固有の機能が優先されるため、別途配置計画を検討するものとする。

配置対象空間としては、大学の顔、アライバルポイント、キャンパスモールのたまり空間や広場、キャンパスコモン等となり、アートの種別との対応関係は次の表のようになる。

②環境的アートの配置イメージ

環境的アートの場合、配置位置は原則としてメッシュによるため、土地利用に関係なく設定される。このため、その場の機能・特性を踏まえつつ、空間に意外性や豊かさをもたらすアートを配置する。

人々は、メッシュをたどることでアート作品を回遊できることとなる。



◆新キャンパスにおけるアートワーク配置のイメージ

表示	アートの種別	対象空間
○	象徴的なアート	大学の顔、アライバルポイント
○	空間を特色づけるアート	キャンパスモール、キャンパスコモン 研究棟のホール等
▥	環境的アート	

4）アートワークのテーマ

- 配置する全てのアートは、下記の理念やサブコンセプトを通してテーマを設定することとする。

理念	「アジア・世界との交流」「地域に開かれた大学」「学・悠・住の充実」 「地域の自然・歴史・文化の継承」
サブコンセプト	理念を表象する言葉や概念を選定・設定 「集」「和」「歓」「究」「拓」「楽」「寧」「悦」・・・
テーマ	上記のサブコンセプト及び設置対象空間の特性を踏まえ、担当アーチスト等が中心となって設定

5）作品のタイプと表現方法

①作品のタイプ

- 彫刻、レリーフ、絵画等の平面デザイン、立面デザイン等さまざまであり、規模もランドマークとなるようなものから1㎡程度のもの（例えば、壁画や舗装面に設置するもの、あるいは部局関係の「史料」を展示・顕彰するもの）まで、多様なタイプが想定される。
- また、ネットワークアートについては、設置数量も数百単位となることから、規模の小さいものが多くなることが予想される。そのため、最小サイズ・規格についても、あらかじめ設定しておく必要がある。

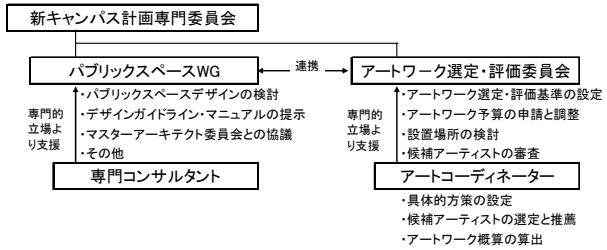
②表現方法

- 素材は耐候性の高いものに限定する必要があるため、石材、金属、ガラス、陶磁器、木材（屋内に限る）等とするが、そのものの“カタチ”による表現に留まらず、風、光、水等の自然現象を組み合わせたアートも積極的に取り込む。こうした点からすれば、（場合により）樹木や自然石等もアートとして見立てることも可能である。
- また、必ずしも単体で完結するだけでなく、建築の壁面、地形、樹木等を活用する方法も考えられる。
- こうした方法を積極的に採り入れることにより、アート『環境』としてより充実したものを目指す。

6）導入のイメージ

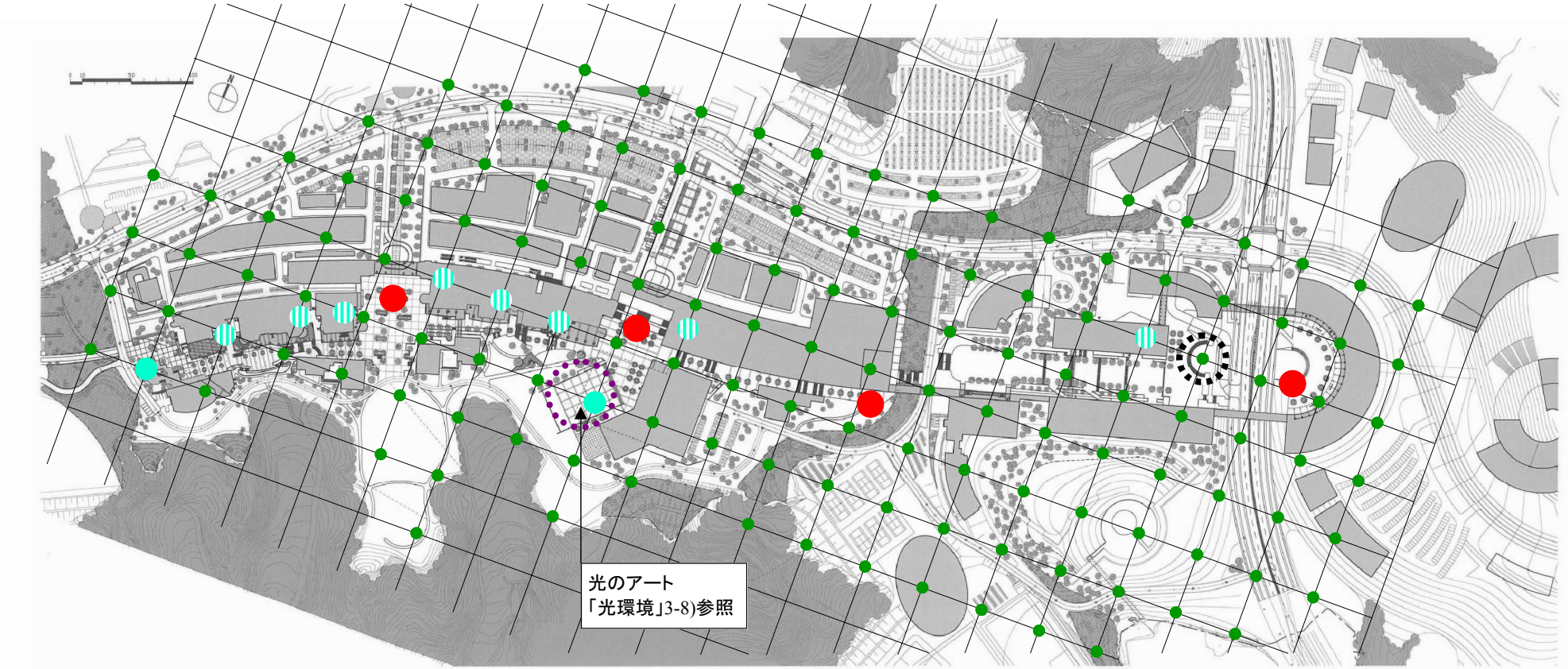
- 公募方式：アーティストを公募により幅広く募り、国内だけに留まらず、海外からも実力ある候補アーティストを選定する。欧米からのアーティストやアジア諸国を含んだ多様な国からのアーティストの参加により、バラエティに富んだ芸術表現を選定することができる。

- 選定評価委員会方式：アーティストを選定・評価委員会により選定し、制作を依頼する手法であるが、アート専門家を含めた選定・評価委員会の下で、候補作家を幅広い中から絞り込んでいくプロセスが踏まれる。芸術の質をはじめ、設定空間との適合性や作品の恒久性、耐候性などを前提とした選定条件、及び評価基準を基に、最適と考えられるアーティストを委員会内で審査していく。



◆アート導入のイメージ

７）モデル空間における配置イメージ



◆モデル空間におけるアートワークの配置イメージ

- センター地区・コミュニティ広場の中心を「原点」とする東西南北50m間隔のグリッドを基準として、アートを配置した例
- 『サイン』システムの“アドレス表示”とも連携したものとする

象徴的アート

空間を特色づけるアート（屋外）

空間を特色づけるアート（屋内）

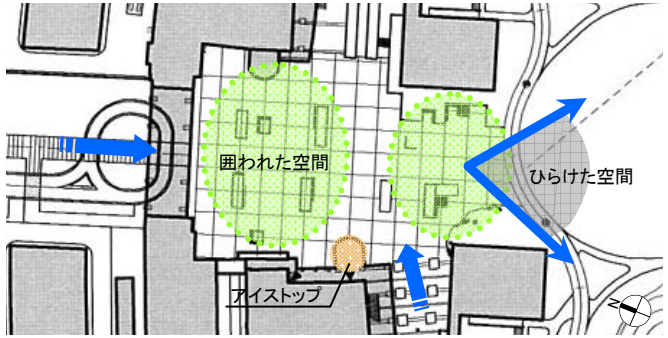
環境的アート

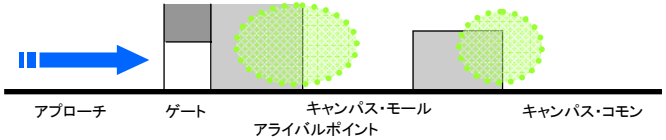
8）アートの具体的展開

①象徴的アート

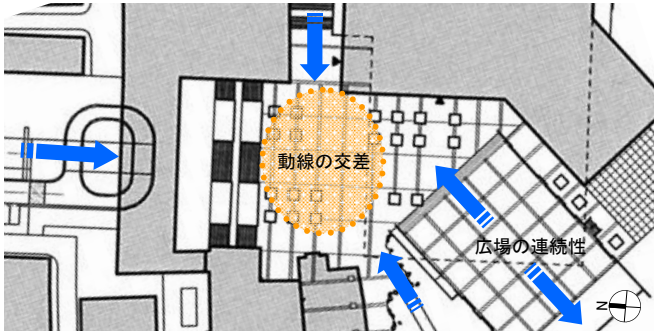
シンボルとなるアートとして、アライバルポイントに配置される“象徴的アート”の配置およびイメージの検討を行う。

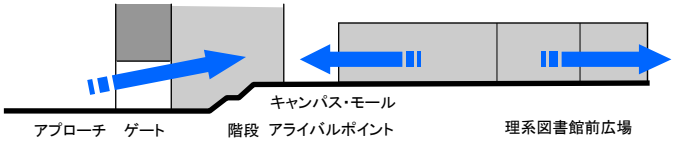
●中央グリーン・コリドー





●東グリーン・コリドー





中央グリーン・コリドーでは、幹線道路からアプローチする場合、建築が創り出すゲート越しにアライバルポイント、キャンパス・コモンを見通すことができる。またゲートからキャンパス・モールの間は高層の建築に囲われた空間であり、キャンパス・モールとの交点を 越えてからは、キャンパス・コモンの広がりをもった空間が展開していく。建築の一部はキャンパス・モールからのアイストップとなっている。

中央グリーン・コリドーにおけるアートワークの展開に当たっては、

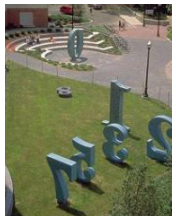
- グリーン・コリドーからキャンパス・コモンに至るビスタ軸
- キャンパス・モールから建築のアイストップに向かう軸線
- 囲われた空間あるいはひらけた空間でのアートワークの展開
- 高層の建物(約40.0m)に囲われた空間でのアートスケール
- 広がりをもった芝生＝緑の空間を背景としたアートスケール

東グリーン・コリドーでは、幹線道路からのアプローチ部とアライバルポイントの広場とは、レベル差5.0mの階段で仕切られている。このためアプローチ部からはアライバルポイントを見渡すことはできない。アライバルポイントはキャンパス・モールの動線との交差部となり、さほど囲われた印象を与える広場とはならず、理系図書館前広場へと連続していく。建築の一部はキャンパス・モールからのアイストップとなっている。

東グリーン・コリドーにおけるアートワークの展開に当たっては、

- アライバルポイントへのアプローチ時の階段によるシーンの展開
- アライバルポイントから理系図書館前広場への空間の連続性の確保
- 階段による広場の見え方の変化を考慮したアートスケール

等の点を視野に入れた配置、規模設定が考えられる。



②空間を特色づけるアート

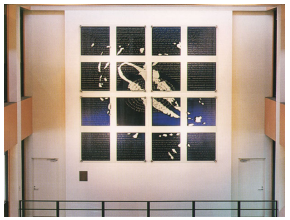
屋内外を問わず、それぞれの特性が明確な空間に、その空間のもつ特色を活かしつつ、相乗効果により強い印象を与えるアートワークを展開する。

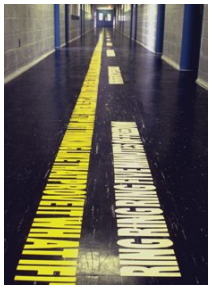
●屋外空間

キャンパス・モール等の中にあってひとつのまとまりをもった広場空間、建築の中庭、キャンパス・コモンの広がりをもった空間などに配置する。アイストップとなる壁面を利用したアートや、広場での休憩機能など他の機能との複合化を図ったアートワークの展開を図る。

●屋内空間

エントランスロビーやゆとりスペースと呼ばれる吹き抜け空間など、建築内での人の集散の拠点となる、ある程度の広がりをもった場に配置する。屋内の吹き抜け空間や大壁面を利用したアートや、誘導機能、休憩機能等との複合化を図ったアートワークの展開を図る。





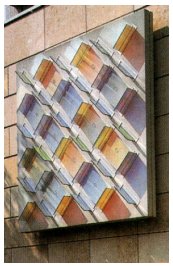
③環境的アート

キャンパス全域にかぶせた『アートのメッシュ』に合わせ、土地利用に関わりなく展開する「ネットワーク・アート」など、様々なタイプのアートワークが考えられる。屋外空間では、独立して存在するアート、サイン・照明・ファニチャーなど空間を構成する他の要素と一体化したアートなど、様々なアートシーンの展開が考えられる。屋内空間では、建築内のパブリックなスペースを構成する床・壁・天井・扉などの建具等の要素を利用した、様々なスケールのアートワークの展開を図る。

④１㎡アート

壁面や舗装面等を利用し、場所の特性に配慮しつつ、サイエンティフィックなイメージ、建築図面、パース、著名な作家のファニチャーなどにより、知的な刺激を与えるアートワークの展開を図る。

サイエンティフィック・イメージ



ランドスケープ